第１回石見神楽伝承内容検討専門委員会議事録

1　開催概要

日　時　令和６年５月 24 日（金）18：30～20：15

場　所　浜田市立図書館　多目的ホール

出席者　別紙名簿のとおり

2　議事次第

(1) 市長挨拶

(2) 委員会の設置について

(3) 協議事項

① 会長・副会長の選任について

② 会議の公開について

(4) 報告事項

① 石見神楽の保存・伝承に向けた検討について

② 石見神楽に関する観光交流課の取組について

(5) 意見交換「石見神楽の保存・伝承に向けて必要な取組について」

3　議事録

(1) 市長挨拶

久保田市長より挨拶。内容は以下のとおり。

久保田市長	第 1 回石見神楽伝承内容検討専門委員会の開催にあたりまして一言ごあいさつを申し上げます。 本日は皆さんにおかれましては、大変お忙しい中お集まりをいただき、誠にありがとうございます。 皆様、ご高承のとおり、石見神楽は当市が誇る伝統芸能であり、市内には 50 以上の神楽団体がございます。また、当市は石見神楽面や衣裳、蛇胴といった神楽産業を生み出した、言わば石見神楽の本場でもございます。 しかしながら、石見神楽の保存伝承に向けては、いろいろと課題もございます。少子高齢化に伴います神楽の担い手であったり、或いは神楽関連産業従事者の後継者の育成、さらには神楽団体の運営の厳しさ、情報発信のあり方などなど、いろんな課題があるところでございます。 こうした課題に対しまして、市としてもこれまでいろいろな取組をさせていただいております。例えば、衣裳や蛇胴等の用具購入に対する補助であったり、神楽産業の事業者を対象とする応援給付金、さらには、東京や大阪といった都市部でのプロモーション活動であったり、神楽産業ツアーの造成であったり、さらには、来年開かれます関西万博に向けた取組、こ

	ういったことも、これまで行ってきているところでございます。 　さらには令和 5 年度施政方針の中におきまして、国内外への情報発信拠点として、石見神楽伝承館の設置検討も、表明をさせていただいております。石見神楽をつくり出したまち浜田としてですね、当市の貴重な石見神楽文化を後世に伝えることも大変重要なことと、このように考えているところでございます。 　この専門委員会におきましては、石見神楽や神楽関連産業の保存、伝承に向けての必要な取組について、委員の皆様方のご意見を伺い、検討を重ねて参りたいと考えております。 　本日はどうぞよろしくお願いいたします。

※市長挨拶後、各委員及び教育委員会職員の自己紹介。

(2) 委員会の設置について

事務局より、資料１に基づき説明。

(3) 協議事項

① 会長・副会長の選任について

委員より、事務局案を提示するよう提案があり、賛同を得た。

事務局より、会長に島根県立大学の豊田知世氏、副会長に石見ケーブルビジョン㈱の福浜秀利氏を推薦し、全会一致で承認された。

② 会議の公開について

浜田市附属機関等の会議の公開に関する要綱に基づき、録画配信を異議なく承認された。

(4) 報告事項

① 石見神楽の保存・伝承に向けた検討について

事務局より資料２に基づき説明。

② 石見神楽に関する観光交流課の取組について

観光交流課長より資料３に基づき説明。

(5) 意見交換「石見神楽の保存・伝承に向けて必要な取組について」

浅沼委員	島根県全体として神楽は非常に盛んだと言われていますが私の認識としては、出雲神楽の団体は 75 団体あり、石見神楽の団体は 133 団体あります。人口を見ますと、出雲部の人口約 45 万 1 千人、石見部の人口が約 17 万 4 千人であり、人口に対する神楽の団体数は、石見神楽が圧倒的に多くていかに地元にすごく根ざしている、地域に密着しているものかというのが数字を見ても感じられるところです。 私は浜田市文化財審議会の委員をさせていただいておりますので、学術的なところでの伝承というのを期待しています。それには個人的には拠点施設を整備していただきたいと思います。そこへ浜田の明治以降の様々に展開してきた神楽の資料を集中させて、そこに行けば全て分かるというような形に展開していただけないかなというふうに期待しております。 一方で、明治より前の神楽というのも、非常に貴重と思っておりまして、出雲神楽は佐陀神能というのが、江戸時代の初めにそれまでの神楽の構成を整理して、能の形式を少し取り入れてから整理されました。石見神楽の場合はそういった整理されたっていうものがないというか、昔のままの姿をとどめつつも、明治にまた新しい考え方が入ってまた改正されて、新しいものもあれば、古いものも両方を石見神楽は持っているというふうに思っております。そういったものを見られるような形というか、そういった伝承の仕方というか、内容を残していただきたいなというふうに思います。
仲野委員	私は現在、島根県立大学の非常勤講師をしており、その中で文化遺産活用法という授業を担当しています。その中で、私自身も神楽について勉強していて、実際勉強するとすごく面白いと思いました。例えば大元信仰などの古いお話もあったりとか、地域とか自然の信仰もあったりだとか、それが近代になって明治以降、また新しい展開を持っていく歴史の面白さっていうのは、なかなか本を見てもわからないところもあるので、実際そういったことは、展示施設っていうのが、やっぱり必要だろうなというふうに思っています。 もう 1 つ、いわゆる後継者の問題ですけれども、私は今年の 4 月から、仁摩高校で新しい社会科の教育課程の中で設けられた「石見銀山ガイド」という科目を担当しています。身近に石見銀山があるということで、生徒たちが実際に現地でガイドを行い、人材育成を 1 つの目的として、高校が取り組んでいます。そういう意味では、浜田市の高校が、部活動だけでなく科目として子どもたちに教えていくというのも重要かなと思います。さらに言えば、福井県立大学は恐竜学部というのがあるので、例えば、それ

小川委員	こそ島根県立大学で神楽学科みたいなのを設けていただくと良いと思います。先般、他の地域から来た学生と話しをして、自分が神楽を演じるわけではないが、神楽が好きだから神楽に関わりたいから、浜田に残るということでした。そういう動きがあるというのはすごく重要だと思います。保存に当たってはやはり情熱っていうのは１つ重要なポイントになるのかなと思います。 もう１つ、保存や維持をしていくためにはお金の問題があります。いろいろな事業をされていますけども、それをマネタイズ（収益化）することが必要と思います。パンフレットを見ても石見神楽はアートとしてもすごく魅力的であるため、ＤＸ化やNFT（Non-Fungible Token）技術を活用し、コンテンツをデジタルデータ化して、世界で売っていく可能性もあるのではないかと思っています。 そういう意味では情熱と、お金っていうのをどういうふうにこれから検討していくかが大きな課題になると思います。 私は神楽を実際にやっている立場なので当事者の意見を言いたいと思います。前２人の委員からお話がありましたけども、施設のことについては、これは50年近く前から叫ばれていたことでもありますから、やぶさかではないですが、今回は保存継承に向けての話ということで、これは個人的には別問題の話と思っております。この検討会の中で施設が重要であるということとなれば、またそこから話をしていかなければならない問題として、また重要な問題ですので、保存継承の議論の中で、色濃く話をするというのは、まだ早いと個人的に思っております。 保存継承に向けて、必要な取組は多岐に渡ります。石見神楽の大切な教えというのはほとんど口伝で行われてきたということがございます。私もいろいろ勉強する中で、これまで資料はほとんどなく困っていますが、その口伝の部分をいかに今後、残していくかということを大切にしているつもりです。人から人へ伝わるものであり、また有形のものと違い、崩れて人がつなげれば、崩れていくということがあり、非常に重要なことだと思っております。その中で、石見神楽を文化として正しく理解することの努力が必要であると思っております。私が取り組んできた、また聞かされてきた中で、いろいろ学んでいくと、間違いや嘘を発見することがありました。やはり後世に絶対に嘘は残さない、間違いを残さないという姿勢が非常に大事になってくると感じています。 それから、委員の中には、実際に神楽を各地域で伝承されている方々や、ものづくりの方々といった専門家がおられます。当事者の意見は重要であり、この方々の意見が全く反映されないということは、有り得ないという

	であろうと感じております。今日は、そういった意味では、多岐にわたるいろいろな先生方や、当事者の方々もおられますので、この委員構成については非常に考慮されたものと個人的には評価しております。 　石見神楽というのは市の観光交流課からも話がありましたけれども、観光行政というか、変化を受容しながら行われてきたということも、これは石見神楽の持っている大切な文化です。日本には、いろいろな民俗芸能がありますけれども、全く変化をしなかったものは個人的にはないと思います。中でも、石見神楽は際立って時代を担ってきたというか、一方では観光に傾倒しているとよく評価されますが、だからこそ大事なものであるという認識のもと誤解をされないように継いていかなければなりません。石見神楽は派手な部分ばかり見られますが、神に向けて舞うことが大前提であり、儀式舞で舞われている舞も非常に大事にされてきています。ただそれは注目をされてないだけで、他の民俗芸能と比べて甲乙というか浅く見られたりすることもありますが、全くそんなことはありません。能舞も含めて幅が広いというだけで、古式の舞も伝承されています。 　パンフレットの中にもありますが、「石見神楽をつくり出したまち」という言葉を私も率先して今最近使いますが、これが、浜田の神楽として何を意味しているかということをよくよく考えていただきたいと思います。また、この言葉を自信を持って言える地域、市民になって欲しいという気持ちがあります。これは深い意味があり、今日神楽産業の方もおられますけれども、これは浜田市のみがいえることです。「石見神楽の本場」と言っている他の自治体もいますが、「石見神楽をつくり出したまち」というのは浜田のみが言えることです。 　それから、一番大事なことは舞の文化はどうやって継ぐのかということです。石見神楽はホールでも、ショッピングセンターも舞われるため、多様性があると全国的にも有名ですが、本来、神楽というのは舞殿で舞うものであり、それを大事にしていかないといけません。後世に、夜明かしの舞の文化や、30 番以上ある番数をどうやって残していくかが大切です。 　それから、皆さんどうお感じになるかわからないですけれども、例えば自分が観光に行って、その土地で大事にされていない偽物が見たいか。その土地で大事にされている本物が見たいか。圧倒的に後者だと思います。地域で大事にされるものを作っていくということが、またその観光などにもつながっていくと個人的には感じております。
山本委員	私が今できることというところで何かないかなと考えたところですが、やはり個々の組織体を強固にするということが一番重要と思います。組織体というのは社中もありますし、神楽協議会もあります。

	また、少ない人数で構成された小さな社中は、生まれた瞬間から神楽をしなければならないような環境です。そういった中では5年10年のビジョンを各社中でも考えていかなければならないと思っています。 先ほどありました奉納神楽、祭典における巫女神楽、そういったところの継承も考えていかなければならないと思っています。 また、神楽協議会の改革にも努めたいと思っております。コロナ以降、特に金城町の協議会が機能してなかったのではないかなと思っております。このような会議の報告も末端まで伝わっていないことや加入のメリットがないとか、そういった社中からの声もありますので、協議会自体が機能していなければ、こういった保存伝承には繋がらないと考えています。今後は、脱退した社中にも声かけをしていきたいと思っていますし、新たな仲間が増えればと思っています。こういった会議体を通じて、各々の組織体が強くなるということを祈念しています。これからは積極的に、協議会の改革に努めて参りたいと思っています。
大賀委員	現在、旭町は11社中の神楽社中があります。昨年度、高齢化また少子化のため、1 社中脱退したいというお話がありました。脱退というのは少し寂しいということで、休止という形で、今現在10社中で、この保存会活動しています。そういう中で、話が出てくるのがこの先 10 年後、20 年後、どうなっているのかなっていうとこなんですけども、人がいないから難しいのが現状だと思います。高齢化もあり、毎年、お祭りする度にお宮に来られる人も減っています。 では、今後どうしたらいいのかというところですが、1 つは、すでに取り組んでいることですが、他の社中、また団体さんとの交流神楽です。また、先ほど高齢者の話もしましたけども、高齢者が宮に上がってくるのが難しければ、来てもらいやすいまちづくりセンターで行ったり、また、夜でなく昼間に開催する形をとっているところもあります。 また、最近 YOUTUBE などのネット配信で、いろいろ配信されていますので、今まで見られなかった人が見ることができる状況となっています。どんどんそういうところを発展させた方がいいと思います。 少し脱線しますが、うちの団員が、ネットオークションで神楽の面や衣裳が転売されているのを見たそうです。実際、安く買えるからありがたいという面もありますが、価値のあるお面などがそういったところに出ているのはもったいないという思いもあります。そういう意味では、今後、なくなってしまう社中もあるかもしれませんので、神楽伝承館というものが、あっても良いのかなと思いました。
梅津委員	弥栄の協議会は2社中であり、こういう会議の話も末端まで伝わってい

	ます。今一番、問題なのはやっぱり継承できる人間の数が、極端に少ないことです。人口も少ないため、いかに興味を持ってもらって入ってもらうかが大切です。実はYOUTUBEの動画や公演にしても、1時間で2演目とか、2時間で3演目をお願いされることがあります。まともにやるとできるわけがないし、端折った神楽を見てもらって、こんなことかと思われるのはすごく癪ですので、どこをどう縮めるかをものすごく検討しています。それがずっと続くと、新しく入ってきた人にとって、それが本当の神楽になってしまう。神楽は神話なので端折ってしまうと、物語を伝えたことにならない。そういうのも、元のちゃんとストーリーを知った上であれば良いのですが、知らなければねじ曲げてしまったものが伝わってしまい、結局は伝承にならない。観光ＰＲもいいでしょうけど、結局大蛇の 50 頭、20 頭立ては神話の中にはありません。 　例えば、九州の高千穂の神楽は端折っていません。発信の仕方も、フルで発信して興味を持った人はそこへ行ってみる。そういうのもやっぱり大事にしないと、本物が見えないと駄目だと思います。見てみて興味を持つまでのものを発信しないといくらここへ来てみても、大蛇が暴れているだけだとか、短い時間でできるのであれば安くできるとか、そういったイメージを持たれるのは駄目だと思います。その発信の仕方というのは、YOUTUBEにしても、SNSにしても、すごく大事だと思います。興味を持ってもらった後、浜田に観光に来て、本物を見て、それに関わりたいと思う人もゼロではないと思います。それが口コミで広がって全国に行くのもこれもまたいいことだと思います。そうすれば、継承人口と言いますか若い人たちが入ってくれるようになるということもあると思います。うちの社中にも、他所から帰ってきて10年続けている人や、高校生で入っている団員もおります。それと、趣味で舞うのではなく、継承するという気持ちが自分の中にないと継承にならないので、そこをどう伝えていくかということが大事なことだと思います。
丸山委員	三隅は、7、8 年前ぐらい前は 6 つ社中が協議会に入っていましたが、1 つの団体が外れまして、今は5社中が神楽協議会に入っています。 　三隅は昭和62年から続く、今年で38回目の神楽大会があり、古くから続けてきましたが、だんだんと社中にも後継者不足が出てきまして、その大会では最後に舞う社中が大蛇を舞うということになっていますが、大蛇が舞えないという社中も出てきております。昔はどこの社中も 8 頭ぐらい出して大蛇を舞っていましたが、だんだん数が減って 4 頭も出せない社中もあります。うちの井野神楽社中も10年後にあるのかなということを個人的にも心配をしておりますが、うちは島根県の指定を受けている社中です

川神委員	ので、どうしてもそれだけは阻止したいなと思っております。昔からうちの社中は地域外から入れないっていうような、そういう古い習わしもありましたが、その辺は少しずつ変えていきたいと思っております。どうしても地域に人がいませんので、他所から新たな人を入れてきて、この井野神楽というのを継承していきたいなと思っております。 　また、リハビリテーションカレッジの学生に今度の三隅の大会で司会をしてもらえないかとお話をさせてもらい、今、1 人司会を受けてもらえることとなっています。そういうようなところから、少しずつ神楽の魅力を感じてもらって、裾野が広がっていけば良いと思っています。 　どんちっちサポート IWAMI は子ども神楽の会ですので、今、活動としても子ども神楽の未来を作るというキャッチコピーを持って、子どもたちの石見神楽を知る・舞う・学ぶ機会を作っております。 　具体的には、今年中止にはなりましたが、浜っ子春まつりに鬼行列として、保育園児から高校生まで子供たちが大体 60 名、大人 40 名の合計 100 名ぐらいで参加をする予定としていました。その他にも、毎年の子供神楽フェスタの開催であったり、石見神楽かるたを作って子どもたちの交流を図っています。 　元々、この会はなかなか子どもたちが神楽の発表をする場がないということで、子どもたちの憧れの舞台を作ろうという目的で立ち上げられ、2022 年には石見ケーブルビジョンの協力で、ふるさとイベント大賞のふるさとキラリ賞を受賞させていただきました。今年は、ユネスコ協会連盟のプロジェクト未来遺産 2023 に会の取組が認定され、6 月の大会において授賞式も予定しております。 　今、この会の役員のメンバーのうち半分は、子供神楽フェスタの舞台を経験したメンバーに世代が変わってきており 20 代 30 代が半分ぐらいいるような状況です。また、自分のいる社中は、今 20 代が 8 名在籍しており、この大会を経験した人間も多く、先輩方がまいた種が今、着実に育っているかなと思います。 　その中で、課題も見えてきまして、1 年に 1 回の発表の場ということで、実際に舞台に立てる子が全員は無理ですので限られてきます。場所と設備があれば上手下手関係なく、全員にチャンスがあって、舞う機会がつくれるかなと思います。やはり、子どものときの感動体験、舞台に立てた緊張というのは、大人になっても覚えているものです。こういった中で、コロナ禍もあり、祭りやイベントが中止したことで、石見神楽に触れる機会、体験が失われております。コロナ禍の 3 年間、神楽にふれてない子どもたちがいますので、石見神楽を舞うだけではなく、体験、学びを取り戻す種

	まきをもう一度やっていきたいなと思っています。 　この石見神楽が、世界、全国的にブレイクした契機の１つとして 1970 年の大阪万博がありますが、2025 年には関西万博があるということで、ぜひこの場に、子どもたちを連れていき、島根県が誇る郷土芸能を背負っていってもらいたいと思っています。 　個人的な発言にもなりますが、「神楽さまさまなまちづくり」ができればというふうに思っております。これは、神楽が好きでも嫌いでも、神楽があるから人が浜田に来る。若者が浜田に残る。神楽があるから祭りが盛り上がる。そんなまちにできたらなと思います。全員好きになるっていうのは、どのジャンルのものでも無理だと思いますので、市民が誇れるものになっていけばと思っています。ですので、観光であれば観光用にかっこよくしてもらいたいし、たくさんの観光客に来てもらいたいと思っています。なぜそう思うかというと、先ほどの先輩方の話でもありましたけど、僕らのフィールドは、お宮の祭り、奉納神楽っていうのがやっぱ一番のメインです。宗教的なものではなくて集いの場として、奉納神楽を体験して育ってもらいたいと思っています。子どもはみんなやっぱり石見神楽が好きですし、そのまま好きで育ってもらいたいと思います。地元の神社の祭りに、東京から取材に来た方から、こんな仕掛けは普通都会ではできないと言っていただきました。神楽を舞っているおじさんは、子どもからしたらヒーローです。僕もそういうふうに育ってきたので、浜田が好き、残りたい、戻ってきたいっていう人を子ども神楽の段階から育てていきたいと思っています。その祭りの継続のために自分としては、観光の方にも協力します。それによって、潤ったまちの人たちに地域の祭りを大事にしてもらいたい、担い手になってもらいたいと思っています。皆さん、良い取組、思いを持っていますので、何とかこう神楽の中だけではなくて、行政・経済を巻き込んで、点であるものをうまく線にしていけたらなと思っています。 　最後にまとめると、自分としては、子供たちの、知る・学ぶ・舞うことを叶える体験、観光に来た人が満足できる体験、その２つを実現するための手段が、箱物や伝承館であるならばそういったものを作るべきであるし、目的である「神楽さまさまなまちづくり」を達成するための手段は何かを探していきたいと思っております。
植田委員	現在の、石見神楽と言えば、2 つの流れがあるのだと思います。1 つは新舞、それと旧舞です。今の石見神楽と言ったらもうほとんど新舞が主体です。2、3 年に 1 回でも旧舞だけの大会をしてほしいと思います。これから石見神楽の真髄である、旧舞が廃っていくのではと心配しております。 　今後、旧舞を一般に、知っていいただいて、神楽にあんな舞があったの

	かと再認識してもらいたいと思います。
柿田委員	ものづくりに関して、言わせてもらいますが、石見神楽面については、戦後、戦前に永見家と、木島家のお面が、大体使われていて、その後戦後に、岩本竹山さんと日下さんと、岩本万吉さんというこの御三家、それを見て、うちの勝郎も育ってきて、戦後この４人のお面が、ほとんどの団体のところに行き渡っています。浜田市以外の石見全体、また、広島、山口でも、この４人の面が、相当使われています。その源流となった木島家とか、そういった面の型はおそらく市が保管されていると思いますが、私としては、そういった昔の型を見せてもらったりとか、またそういう型は、ある程度使って、粘土で起こしてあげたりしないと傷んでしまうので、面の伝承も必要と考えます。今は、いろいろなところでお面を作っている人がいらっしゃいますが、その技法は全てこの浜田で生まれた長浜面技法で皆さん作っておられます。この長浜面技法というのは、浜田の長浜地区で生まれた唯一無二のもので、それが広島で作ろうが江津、益田、大田で作ろうが全部長浜面の技法です。その大元の保存してある型を１回見せてもらいたいという思いを持っています。浜田の大切な歴史を守るためにも、そういうものを大事にしないといけないと感じています。何年か前に、岩本竹山さんが店の方を閉められましたが、その型が流出したりしています。そういうものも浜田市としてきっちり管理してもらって、私や他の面を作られる方に、そういった昔の型を使って、作り直すというか、息を吹き込むというふうにして、１つ１つ調査していかないといけない時期ではないかと僕は感じています。 また、継承と言ってもなかなか私たち神楽産業は、弟子を取ってどんどん広めると言っても、どうしても弟子をとると一人前にしなければという責任がありますし、金銭的な面もあるので、簡単には取れないのが現状です。そういったところも何かうまくカバーしていただけたらと思います。ものづくりの方も、浜田で生まれたものづくりが浜田からなくなったら何の意味もないので、そういったところにも目を向けていただきたいと思います。 また、私は島根県のふるさと伝統工芸品には指定を受けております。伝統的工芸品産業振興協会で全国いろいろなところに出ることがあり、島根の伝統工芸として出るのですが、本人からすると浜田で生まれたものづくりなので浜田を背負って出たいという気持ちがあります。植田さんが去年、市の文化財指定を受けられましたが、衣裳も面も浜田にとっては現状何でもありません。浜田にとって何だと言われても、胸を張って浜田の文化財ですと言えないのが現状です。その辺もちょっと考えていただきたいと思

	います。 　あと、子どもたちが授業で来ることがあり、石見神楽の八調子と、石見神楽で使っている道具は浜田が生み出したと必ず教えますが、大半は知らない。例えば青森県の小学生がリンゴの品種を全部言えるような感じで、浜田で育った子どもたちは、浜田には石見神楽があって、石見神楽の面とか衣裳、笛、花火、蛇胴も全部浜田が生み出したと言えるように育っていただいて、県外に出て、自己紹介するときには、私たちの生まれたところには石見神楽がありますと胸を張っていえるように、授業などそういったことも、力を入れていきたいなと思っています。
小林委員	各委員からご意見出たように、人口減少によりやはり後継者不足というのがありますが、先ほど観光交流課も言われたように観光、県外の方への発信については大変していただいて、細川衣裳店にも石見神楽衣裳店の老舗ということもあって、大変興味を持っていただいて毎年、毎月のようにたくさんの方に見学にきていただいています。 　しかしながら、地元の人たちは、石見神楽は見たことあるけど、こういった裏方の仕事を知っている人が大変少ないなっていうことを最近非常に感じています。私も若者ということもあって最近、小学校や中学校の授業に呼ばれることもあり喜んで参加をさせていただきますが、こういった文化だったり、ものづくりだったりがあるということを知っている子が少ないです。これを機に知っていただくこともありますが、まずは地元の方に、石見神楽に興味を持ってもらって、知る機会、知る場を、もっと作っていかないといけないと思います。 　また、子どもたちに伝えるとなると、もちろん、これまで多くの経験をされた方々の口から聞くということも大事だと思いますけど、子どもたちにとって年の近い人から伝えてもらうと、より興味を持ってもらえるということを感じました。今後こういった後継者の問題を考えていく上では、学校教育の中でふるさと郷育として、石見神楽の授業も必要です。もちろん県外の方々に見てもらえる場っていうのも作っていかないといけないと思っております。
永岡校長 （真島委員代理）	私見が入ってもいけませんので、一般論になるかもしれませんがお許しください。我々教育現場とすれば、学習指導要領に則っていろいろな教育活動を行っております。学習指導要領には、我が国の伝統や文化に触れ、認識を深める機会をという文言があります。ふるさと郷育の話も出ましたが、そういうところで、それぞれ各学校が取り組んでおります。また学習指導要領には、各教科の目標や内容を踏まえ、地域や学校の実態に合わせ、伝統や文化に関する学習を適切に位置づけるということがうたってありま

	す。浜田市内、数多くの学校がありますが、それぞれの学校規模であるとか、地域、場所に応じて今できることをしっかり行っています。先ほど出たお話に関しましても、総合的な学習の時間を使って、面、衣裳、蛇胴など伝統文化に触れています。 それで各学校で取組は違いますが、私がいる弥栄中学校では、学年の希望を取って、神楽と和太鼓に取り組んでいますが、必ず卒業するまでには、神楽を最低１回行うようにしております。これについて、本校の目的としは地域貢献としています。高齢者施設に伺っての公演や学習発表会で発表をして、地域の方に見に来ていただいて喜んでもらうことを目的に取り組んでいます。委員である真島校長の弥栄小学校も同じような取組を行っており、弥栄の産業祭で神楽を舞ったりしています。補足ですが、本校の取組は課程外活動という形で取り組んでおります。神楽だけの授業としてはなかなか取り組むことができませんので、そういう意味では、教育課程外ではありますが、聞くところによると 40 年以上続いているそうです。そういうことを大切にしながら、取り組んでいければと思っております。
福浜副会長	今日、皆さん方のお話を伺って、本当にこういった会議が、なぜ今までなかったのかっていうことを思った次第です。 神楽に限らず一般の話になろうかと思いますが、伝承するには先ほどありましたように、食べていけないと、若い方々が続けていけないと思います。蛇胴、面、衣裳など神楽産業の皆さんが食べていくためには、やっぱり発信拠点、情報発信していかないと、どんなビジネスもうまくいかないので、そのための拠点づくりが必要だと思います。そこにしっかりマネタイズするための、知恵を皆で出していかないといけないと思います。この浜田で一番誇りにしているものを、まちづくりにしっかり活かすにはやはりしかるべきところに拠点を置いて、しっかりそれを発信していくことが重要です。バーチャルも良いですが、どんどんネットでそういったことを全世界の方に拡散していくとなると、絶対本物を見たいという気持ちの方が大きくなってくると思います。まちに来て、やはり一同に見ることができるものを何とかしていくことが、1 つ今後の伝承を考える上では必要かなと思った次第です。 あと、情報発信の中では我々も今、神楽を放送していますが、市民の方々から一番たくさんご意見いただくのも神楽です。それぐらい皆さん関心のあるものでございますので、市民の方々に聞いていただく機会をぜひ持ちたいなと思っておりますので、この会の配信でいいと思いますけれども、ぜひＰＲしていきたいなと思いました。
豊田会長	今大学で学生を教えていますが、3 年前から学部が少し変わって地域政

	策学部というものを作って、地域により関心を持つ学生が入ってくるようになりました。先ほども委員のお話もありましたように、石見神楽に携わりたいから残りたいという、県外の学生たちも増えつつあり、そういうところに、自分から参加してみたいという学生も多くなってきています。 石見神楽は非常に魅力的なコンテンツですけれども、どんな舞いがあるのか、その変化の過程、どういう人たちがどのような思いでものづくりをしているのかなどをまとめて学べる機会があれば良いということを思っておりました。後継者不足についてですが、後継者を作っていくためには、まず知ってもらって関心を持ってもらうことが一番と思っておりますので、学習する機会、学べる機会があり、学ぶことによって、この地域にはこんな魅力的な石見神楽というものがあるんだということを思った人達が続けていきたいとか、またこのまちで住みつづけたいというふうな思いを持ってもらえたらなと思っています。 石見神楽は先ほど、点を線にいう話がありましたが、これまで石見神楽は社中ごとに舞を変えながら伝統を継いでこられたのだと思いますが、この高齢化、後継者不足になっていく中で続けられなくなったときに、線にしていきながら続けていくような仕組みということも今後考えていかなければいけないのかなと思います。こういう貴重な資源を是非とも残していきながらそれを知ることで、私たちも誇りを持てるようになれば良いと思います。 各委員、一人ひとりご意見いただきましたが、他の委員の意見に対する意見などありましたらお願いします。
福浜副会長	安芸高田は前からですが、今、広島市内で海外の方に向けての神楽の上演含めていろんなところでアトラクションで神楽が出ています。それはそれで、神楽が広まったと点は良いとは思いますが、それは我々、舞手、面、蛇胴など全て本物を見ていますので、何か違和感を感じます。 ただ、それをどんどん発信されています。やっぱり負けないようにというか、本家本元が早いうちに、情報発信ができる体制を整えないといけないと思います。広島では、石見から来ていますけど広島の神楽ですということが言われている状況なので、そこはしっかり、行政も本気になっていると思うので盛り上げていくようなことを、ぜひ皆さん積極的にお願いできればと思います。
小川委員	多くの委員さんから施設のことについてお話があり、私も今日は伝承の部分でかなり言わせてもらいましたが、発信とかそういう伝承するための文化施設というのは舞手とすれば必要であると思っております。市の財政やその中に何を入れるかは、重要な問題なので、これは別で話をしたいと

豊田会長	いう発言をしました。この 6 回の話し合いの中では一概にはできないと思います。委員さんのお話を聞くとですね、そういうものの中にはやはり、本物というか、これまで受け継いできたものがそこへ行ったら見ることができ、舞にしても、舞のあり方にしても見せ方にしても、それからものづくりにしても、本物が学べるというものが大事だろうと感じたところです。 　いろいろな意見をいただきまして、ありがとうございました。本日のご意見については事務局の方でとりまとめ、今後、2 回目以降の検討会の中で議論する点、進め方などの参考にさせていただきます。